




 刀筆青砥石文
 二

^ 13
 3036
 2



門 13
號 3036
卷 2

布指

刀筆青砥石文鸞水箴語卷之二

江隱

曲亭主人筆削

洛客

櫟亭琴魚原稿

第三套

鴨河の涼床

清水の遺扇

劇齋の三條の客店を宿ゆあつて遊山玩水懸念せど遠道の雜費を厭ふ。
住宅求むるものも只管急を急せし密八の大和あり五條の人の氏あり。
曩且く京小もどきり當時放蕩なりれば左右の死のあつて此の所縁を
心あてし紀の藤白へ赴けり。劇齋は隨後をうけり。今も都小の聊渠が
相識ありけり。はまばその友媒姉しく鴨河の西邊小賣家ありと告ぐ。劇齋へ

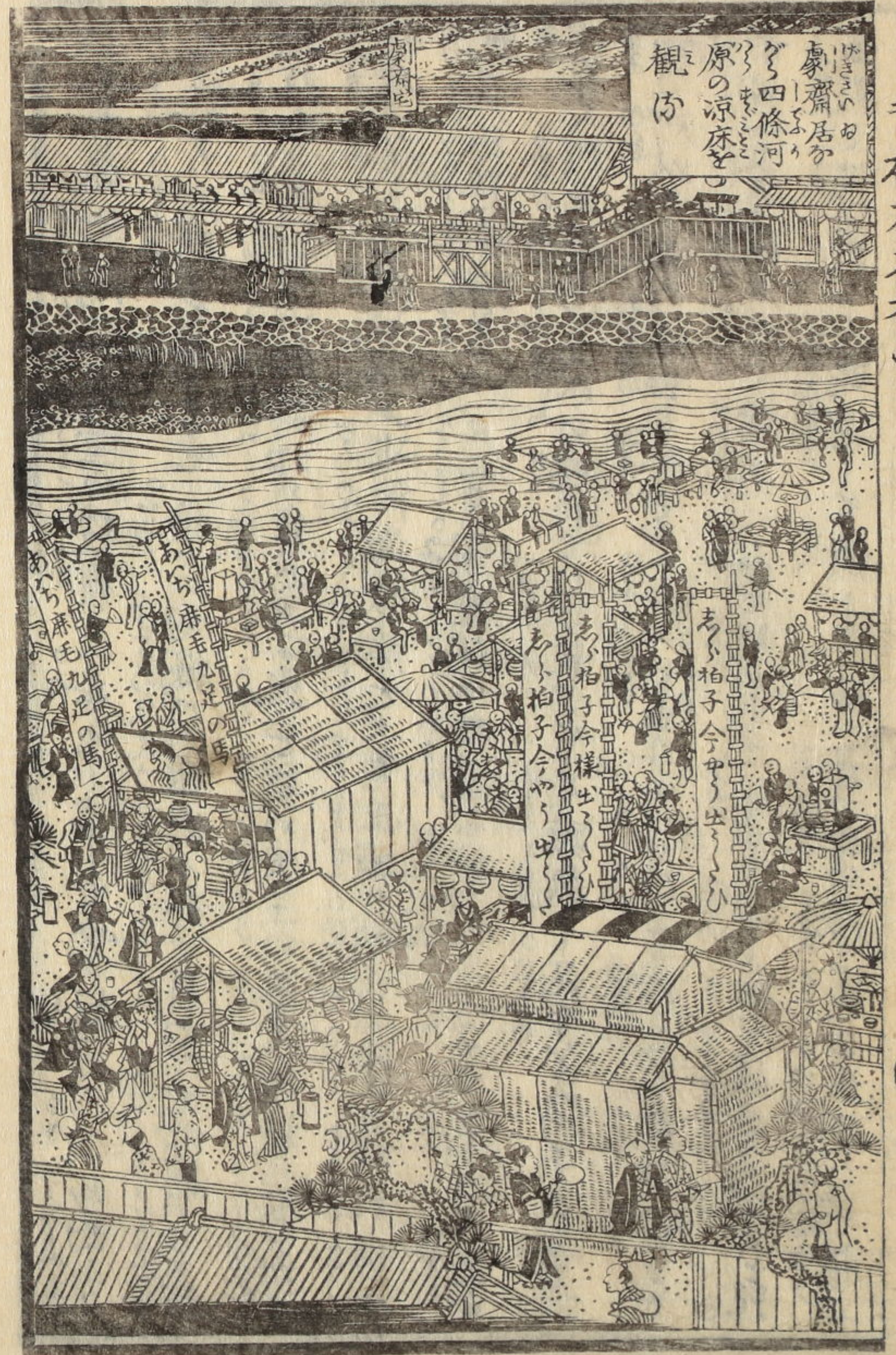
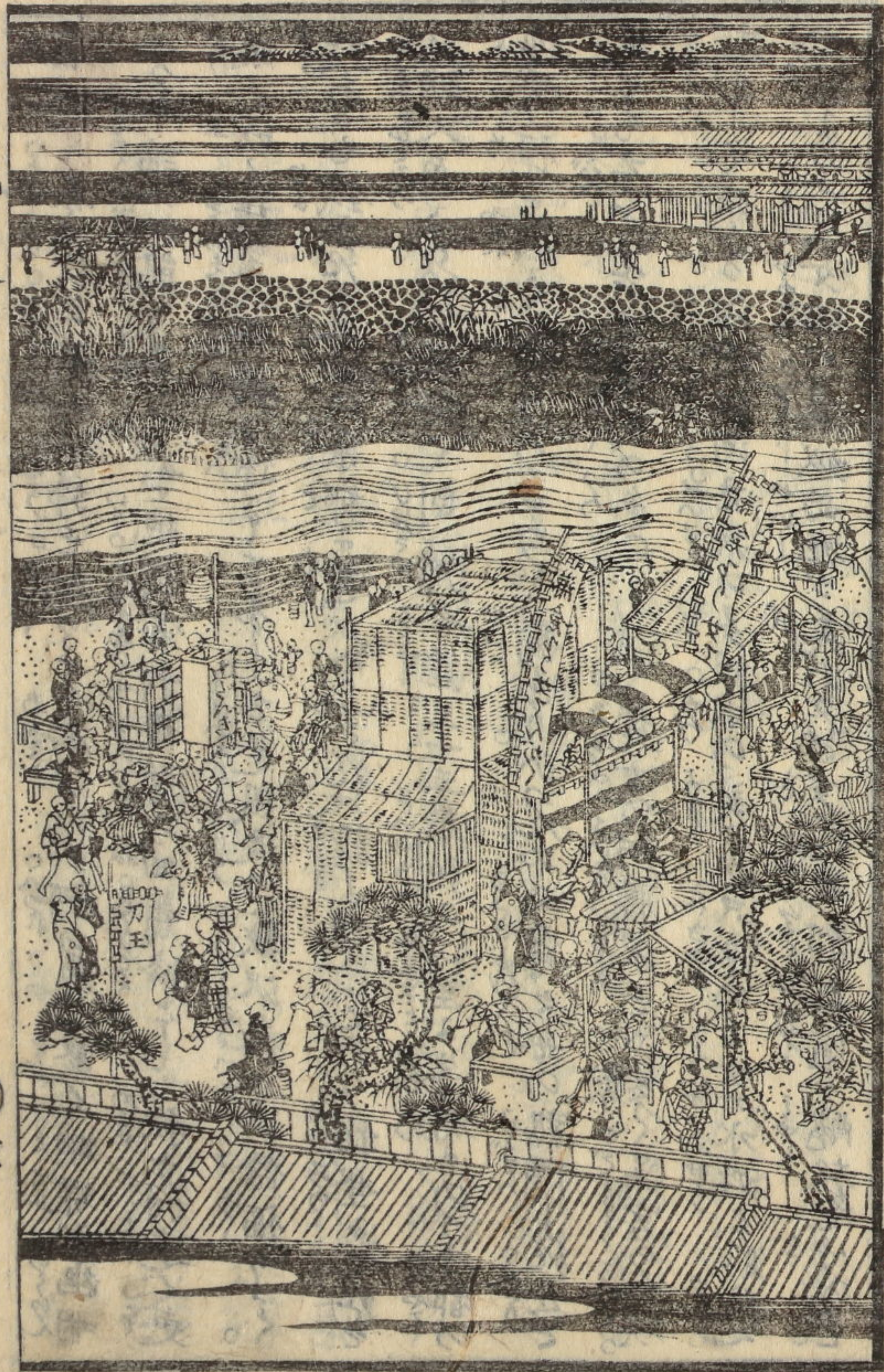
新法

ちやもあられが今この山水人物は暫時俗腸を洗れて奇也々々と賞讃まかいて
 その次の日より工匠四五人を召聚合門の柱根を継ぐ板葺の屋棟を掩着
 母屋を葺更席薦を刺改塀を塗り石を洗しその名一時は見る事のたつた
 めと舞うけけん一見堂との扁額を玄関は打つる傷も亦壁書しとて某の
 人々へ毎日巳時を限とせこれと過れば主人在宿せど遅れればの憾ること
 あり来訪く診を乞んと欲する病人の多く牌を獲て進退志し次第を追
 いかん乱雑せば敢薬剤を興すとや病架ありて来診を乞んと欲せば轎子とて
 迎へて送迎の等閑は只是病架の不信よあり不信仰のものも療はかこ云云と
 写しつるさればその居宅の光景をぬめぬ弥ましく人みかええらぶるにありぬ。

かく劇齋奸智あり豫く巧しむるを竊は蜜ハよろろをゆきく男女を
 えもまだ被此ある貧人を備ひつて菓見は打扮しく或ハ十人十五人朝毎よ
 聚會しつるもの備つるもの各差あり半時床几は尻をうけく調劑を俵賣
 せれば一朝の足幾十銭一時をれば増と幾銭未明より来て牌を取り玄関の
 聚會のもの當座の遅速脩短よりくその賃銭を取らせよれば皆歡びて
 来るるを杖は携り幼社を背負ひて門前をめぐり市の如し。
 かゝく又巳の比より竊は備ゆる轎夫は病架あり轎子もて迎ふと偽せし
 劇齋これより来る日毎は浴中浴外をいといけ、昇走しく日を消し夜の
 更張へ還らざこの夥ある備夫の口を鉗く厚く賂ひ竊は誨て云云といせし。

あのもので流言して此度紀路より上りぬる一見堂劇齋あり未嘗有の
 名醫あり傷寒中風ハ物の教うハ如此々の難産難症痼癩病顛癩狂疾
 廣紀都の医師達みか匙を捨うりと立地は治しうりされハ天飛が雀首の
 愈地を政ふ蹇見も起ざるとや。その虚説ありねばと朝毎は処せぬを乞茶
 奴夥一巳の比より轎子まで迎られて出ぬ日暮ねが還りぬる者塔偏鶴の
 後身飲活茶師とこれとやいん病煩ぬの命惜くハ只この名匠を頼む
 べしと謀々しくいひ徇ら劇齋亦洛中ゆく。あつんき茶店より茶種を
 ぐり召すく日毎は買入さるとあるればこれと彼此を噂しくこの名を
 笑えうり耳と貴び目を賤し新子走り奇を好むとく流瀆の習俗

かれは是ありあつ劇齋は療治をここの少くハ僅は下月より
 ちく今ハ人を傭つども真の茶奴いと多く轎子とて迎請ぶりの日
 とく間断ありなり意を初奸計ハ尤憎む堪えぬもの匙ハ拙
 くと且時運ぬや叶ひうらん大病難症一人とて瘡らどとのめられ
 只是神匠と稱賛せられ利を射ると大さかたかれども左右各番の
 癖をどく密ハ豆蔵ハ分ハ一僕ども増され財入ると多れば諸雜費ハ
 けり劇齋ハ既ハ斯ハのまは掃得ハ後妙もなるくと都へとて
 けり。且高運よる物も併蜜ハが働ぬも太りぬと及ハ渠と親愛と
 配剤の副とを且藏ハ疎れと薪水の支を掌もどもの性老実ありぬ



名高き茶漬へ武蔵野と踊を翫く角つひの何の花は聚く蝴蝶ぞ幽
 今謡へ杜鵑も着て声絶栲衾新羅琴の曲蕭條とく秋の月遠く更
 瀾と吹く横笛の保輔は逐るごとく一方是風流の藪沢春平の餘福あり
 銭あるも銭かたも今この樂都は遊ぶやこれバ諺よるごとく猶登ると花を
 必術人盛ると死へ必仰ぐ劇齋今茲三十五歳紀の山里は生育ののこる都の
 てより視は熟くそのとらまわしく驕りいりぬ又宵々毎の熱鬧し死を
 えくも右とてくも傾国の色のあまき楚女の細腰求むも多く吳宮の魚類
 招びく来るる海内江河井泉の多死水の美りの只京のそ女は水姓これ陰
 世話よのよ京女郎の廢奴西施が美あつとづく東郭無塩が醜奴とづく

甚しけり色好む解語の花の都人或は客商良家の子これが為は産と
 破り家と喪ふもの少く現誰う木石のぞ死劇齋これの光景は情慾
 萌く志稍移り獨漫は皆のや速れも都は倚居る甲斐は一個の美人と
 扱ふこの風景と樂まばかやましく趣あるれども賣色は情薄しく
 費多しこれば活の花中を真の眺へあそぶれこれ幸は發迹く財乏し死
 身もあつたすや良家の美婦ありとも娶るとかへ娶りもせんこれ伊國
 在りし時云云とゆるよ舌もほひつどあよ来てとく娶りば後竟は故郷人な笑
 まんとあせまふかくあせまふとあひつひの日を弥まふを夏は過ぎ秋去りて十月は
 かりはけりこの頃へ流行医と此の暇わればや劇齋へ登八とぬく

観^ミる^ルも^もと^と。嗟^サ峨^ガの^のく^くも^も。赴^シけ^けの^のけ^けの^の真^マ葛^カの^の枯^コ野^ノへ^へと^と。東^{トウ}山^{サン}の^のや^やり^りの^の名^ナ所^{ショ}
 古^コ迹^ジと^と尋^ジ廻^ヘり^り果^カの^の清^{セイ}水^{スイ}寺^ジの^の観^{カン}音^{オン}堂^{ドウ}よ^よ詣^ヨつ^つ舞^マ臺^{ダイ}の^の欄^{ラン}よ^よ左^サ肘^{ジウ}と^と推^ス駕^カて^て遙^{トウ}み^ミあ^アり^リ
 直^チ下^カり^リ多^タる^ルよ^よ一^{ヒト}個^コの^の美^ミ婦^フ人^ニと^と下^カ女^メあ^アわ^ワん^ン二^ニ八^{ハチ}ぢ^ぢり^りの^の女^メの^の子^コと^とね^ねく^くあ^あり^リ
 ぶ^ぶの^の来^キる^ルあ^あり^リ多^タる^ルこの^の女^メ主^シ後^ゴ舞^マ臺^{ダイ}の^の下^ノと^と過^ワら^らん^ンと^とい^いつ^つと^と死^シ劇^{キョク}齋^{サイ}の^の心^{シン}も^も
 小^コ持^チる^ル琉^{リュウ}球^{キウ}扇^{セン}と^と披^ヒん^ンと^とく^く會^カ外^ゲせ^せバ^バ彼^カ美^ミ婦^フ人^ニの^の玳^{ダイ}瑠^ロの^の筭^{サン}の^の端^{タン}二^ニ寸^{スン}ぢ^ぢり^り
 打^ウ打^タり^リと^と扇^{セン}へ^へ傷^ケは^は落^ロち^ちけ^ける^ル劇^{キョク}齋^{サイ}吐^ツ嗟^サと^と驚^{オドロ}け^けハ^ハ蜜^{ミツ}ハ^ハは^はえ^えく^く忙^{マシ}しく^く走^{ソウ}り^リ下^カ
 つ^つ落^ロせ^せと^と扇^{セン}と^と取^クら^らん^ンと^とい^いつ^つと^と召^メさ^さす^すと^と主^シ後^ゴも^もく^く退^{タイ}ら^らん^ンと^とい^いつ^つと^と堂^{ドウ}後^ゴへ^へ駈^カれ^れり^リ
 當^{タウ}下^カ件^{ケン}の^の美^ミ婦^フ人^ニハ^ハ騷^{ソウ}だ^だる^ル氣^キ色^{シキ}さ^さく^く玉^{タマ}と^と延^{ノビ}る^ルと^と死^シと^と抗^{コウ}ぐ^ぐ鬢^{シヅメ}結^{ムス}の^の
 わ^わら^らん^ンと^と撈^{ラウ}る^ルよ^よ筭^{サン}の^の折^セ飛^トる^ルハ^ハ三^{サン}が^ガ一^{イツ}つ^つよ^よも^も足^{タラシ}ら^らぬ^ぬ端^{タン}と^と推^スか^かて^て程^{ハジ}く^く

指^{サシ}頭^{カビ}よ^よ著^{ツキ}脂^{アブ}を^を懷^カ紙^シり^りと^と拭^{ヌグ}ひ^ひぬ^ぬる^ル程^{ハジ}は^は女^メの^の子^コハ^ハ折^セれ^れる^ル筭^{サン}の^の端^{タン}と^とあ^あら^らし^しと^と
 取^クわ^わげ^げの^の塵^{チリ}を^を死^シ拂^フひ^ひと^と拭^{ヌグ}へ^へバ^バ婦^フ人^ニハ^ハ又^{マタ}懷^カ紙^シ兩^{リウ}三^{サン}枚^{ガイ}累^{ライ}し^し隨^ズ小^コ駈^カて^て女^メの^の子^コに^ニ
 取^クら^らぬ^ぬれ^れバ^バ女^メの^の子^コハ^ハ折^セれ^れる^ル玳^{ダイ}瑠^ロと^と包^ツく^く帯^{オビ}の^の間^マに^ニ藏^カめ^め劇^{キョク}齋^{サイ}が^が落^ロち^ちと^と扇^{セン}
 え^え拾^シわ^わげ^げと^と腰^{ウサ}眼^{ガン}の^のあ^あり^リ人^ニ挿^{サシ}け^けり^リか^かて^て女^メ主^シ後^ゴハ^ハ徐^{シユ}く^くと^と登^{トウ}来^{ライ}つ^つ觀^{カン}
 世^セ音^{オン}と^と黙^{モク}禱^{トウ}しく^くと^とあ^あり^リ下^カ向^{カウ}せ^せり^リ劇^{キョク}齋^{サイ}ハ^ハ多^タく^くゆ^ゆら^ら琉^{リュウ}球^{キウ}扇^{セン}と^と女^メの^の子^コに^ニ
 取^クら^らぬ^ぬれ^れと^と惜^シた^タと^と限^{リミ}を^をぬ^ぬれ^れど^どと^と怒^{イラ}の^の大^{ダイ}と^とあ^あり^リね^ねが^が今^{イマ}更^{マシ}に^ニ召^メさ^さす^すと^とい^いつ^つと^と復^{フタ}を^を
 べ^べく^くも^もあ^あら^らぬ^ぬ忽^{トキ}地^チは^ハ真^マ覺^{カク}と^とその^の瞋^セ昏^{コン}ハ^ハ宿^{シュク}所^{ショ}に^ニ還^{マシ}り^リぬ^ぬ叔^{シヨク}の^の次^ジの^の日^ヒハ^ハ病^{ヤメ}架^カ
 あり^{アリ}迎^{ムカ}請^ケれ^れて^て已^イの^の比^ヒ及^キ宿^{シュク}所^{ショ}を^を出^デす^すの^の他^タ三^{サン}四^シ軒^{ケン}診^シ脈^{マク}と^と未^ミの^の下^カ刻^{カク}は^ハあ^あり^リ
 久^ク遠^{エン}しく^く便^{ベン}室^{シツ}に^ニ入^イり^リ衣^イ脱^{ダク}更^{マシ}に^ニ折^セり^リ異^イ杜^トと^とい^いつ^つと^と婆^ハ々^々来^キり^リけ^けり^リと^とあ^あ

提れる芝書いと愛く不ぬまの拙くは。さなき家の奥まといはせむの
 恥くは。過世もろくくは。二親を喪ひら胞兄弟もあく憑いた親類の
 借る良人のと欲せれども遣嫁の支度整ふ又措紳へ給事にはぬんと
 欲せれども規式の衣よる支り然と町の下女をど薪水を帯る人かろは
 ろく吾侍も術あま且身皮の整ふまといひけく声を潜り有得人の
 妻はわれりと勸め侍もどちあは差て兼引むあづく勸め侍りしりバヤ
 ろくは黒頭あろくちやろくの望あり縦有得の家ありとも正妻あつた
 みのあろくその正妻は物を替るを或はいつく妬れて辛死ぬをんへ悲くる
 べし又その正妻のあつたともいつく老るるこへあろく。五六十は及べり人の

ありまむり存命なき吾侍まろくいつく程あく身まろりあろくあろくバ只まが
 所為と人みあいつんと腹まろくたろくあろく又雲の上入物のいひあ進正あろく
 規式ありともあろくをあろく熟ぞとあろくあろく笑まろくこれ亦憂とあろく
 べし。これごとく月もえを花ろくまろくあろく只小厮の遣使ふ商人あろく
 望ろく。年の齡へ三十あろく武家あろく又商人あろく或は醫師吹樂隠居
 備輩あろく妻もあろく家中あろく給銀の多少と問ふ仕へせん。さろく薦あろく
 とも諾ろく。あろく望の多ろく身の落著の遅ろくも理りよはろく。あろく
 世の女子は稀あろく律美人といふは秋その性伶俐故あろく秋あろく。あろく
 鞋で索ねても二人とあろくあろく。あろく可愛あろくあろく。あろく報る善巧方便

清石不文卷一

二十一

劇齋の世尊龍華の説法より愛く覺て頭より身を削つて心動いた
 けむ六いんとするよひひくして。悉く四下をええり。笑む目と共の声を細うし。
 ちるま如くは妻や夜の物の揚ちり衣の出納厨の費もまゝ不自由なれ
 ども都の宿旅が皆縁のよかど八且く措て懸念せだ側室を使んと愛ども
 する給事ほもの浮氣ゆき利するの世帯を任せり。思量りて
 黙止りあるおとの阿磔とやんまが注文は甚協り。こもかこも筋の給復
 せんとあふまが方へ来あれやと潜め問を安果は異社へ満面ち微笑原来
 するは。そのどりまは。を便宜なれ。か。疎く。を。多。を。知。り。ぬ。大。人。の。浮。き。る。あ。り。ぬ。
 なくて情あく。こ。ん。え。ぬ。況。時。め。栄。ま。へ。被。子。が。頭。の。あ。ら。ぬ。ん。か。これ。ぢ。ぬ。

推辞んや清水の観音詣は被子の并を損へり大人は失ひぬ。その角の再び
 返るも縁の端よりあつぬ。あ。ぬ。方。へ。あ。ぬ。せ。ぬ。の。尻。の。お。著。ま。ぬ。心。り。か
 ゆる。被。子。の。幸。の。こ。わ。だ。吾。儕。も。亦。後。を。と。り。と。い。ふ。ど。も。不。定。の。ま。あ。げ。ぬ。と
 点頭せ翌も吉日はゆりかへ見まや入れゆるん復飽まよえぬ。つ。ま。は。あ。ら。ぬ
 稱のせぬ。直に苗やあやもけ。う。あ。ぬ。と。空。語。バ。劇。齋。頻。よ。ち。領。た。の。面
 影へのみえり心操の今までの再び。事。成。り。當。人。ま。承。引。の。翌。々。は。必
 得て来よ。辛苦銭の如此々取せん。の。餘。の。ま。の。箇。様。々。と。耳。と。取。り。ぬ。相。譚
 へ。異。社。へ。あ。ら。ぬ。果。て。劇。齋。が。脱。う。一。衣。を。疊。て。祇。ち。被。け。告。別。せ。ぬ。け。り。

第四套

妾の初見参

醫の鹿嶋立



青石六卷二

つづいげんさい。ひとう
 その次の日劇齋の竊はあらまわれぬ午ありゆく彼此ある病加と大々お
 うち廻り下晡は還るとぞ。且哉は分付る些の散を調へ便室の次の
 房あり子舎ゆく青銭学士張鷟が遊仙窟を讀ながら酒うち喫く
 ぞ。程は黄昏ちりなりより浩処は外小咳しと隔亮を徐と閑るめ
 ありとんまこれ異杜あり莞然とち笑つてほとり近う来て声を密し
 きのふ宣らせ趣を彼文中よと死示しくとゆるかゆる點頭せらるるんと
 ありより躰を曆をえとせし中段の取るとち下段の月徳母倉とゆる
 ありつよれ日はゆるり約束を違へトそとくこをくねく来りあが商いあ
 りととバ劇齋領たくとハあくそおて来りまると召入れをのそぐせば。

異杜へ躰を退れ誘引立て進み入るかく阿磔へ引く隨小老木を
 肩より片明り熱ぬ出居の窓の戸も立ちぬ鮮衣の留奇南と先へ熏
 りて踊る敷居の溝川もささ水ある初見参りの珍し冬枯よ一花
 咲る姫百合の俯くも亦風情あり當下あつ劇齋へ閑居不犯の桑門が如來
 慈雲の來迎を今眼前拜むとく隨喜の涙を沃ぐまよ頭を拳眼を細うし
 熟視ればいぬ日は清水の舞臺を偷見しぬ八音のまよ衣の倚羅を盡
 さいとも京様かたむつ物あり解は文中も餘るべ死黒髪の花沢やある鬢の
 ぞ。鬢の取ま花をわびて趣あり髮際の高士は似る項筋の雪や白地
 顔へ秋月も妬むべく腰へ春柳も羞べし惜や眉を刺されどよの迹の青やうる。

白ひこほれと愛敬つたる縦志賀寺の朝寛ありとも清水寺の老僧ありとも今
 この佳入は邂逅せば亦復色中の餓鬼とある況花を貪り香を偷む凡夫のいづれ
 迷さん劇齋の立地はあらず蕩胸裏は只剛敵に向ふ如く怯ましくいん所をむむ
 異社のとある氣色を察くあるどのほらうは鈍子とさへせらるる見来のちのあかり
 心より稱せあるとのん孟賜えぬといふも耳の聾る如く屢いれく感
 如くこれ復り初とんえり。さありくと遠く又孟とさへせらるる異社は飾しく
 一息は半喫く傍に置れたるその女子同近きれ其かあまりの迫る名何とういひ
 つるが青春の幾あるゆんと同ハ阿磔のやうゆふ膝を進むるほらう近つた妻
 磔とゆれたる年のとせと越てはきどさうの心つたあらん荷兒縁のゆりかば。

心なまのくひ懲りて誨をせぬんを願うとをゆれといふ声はゆい清き
 目も流し秋の波冬の衝の音もまじり侶欲げ多むあは劇齋のいふまじり
 恍惚とく顔は領れとへ憑り心操る家は只兩個の弟子若黨のとありよ
 目れ又毎日とあるけん左も右も守を肝要なれ女子も既とせとめく三四はかん
 何とみ心つたあらん下日もさく居敷く為に苗をぬとめども被替の衣をいひ
 とのり傷をええと異社の阿々とうち笑ひとある脱落ゆらんや然宣はる
 ともわと豫て受はこの子に衣と鏡と櫛笄ハ二祇の重荷を吾侪が負ひし
 引提もしくと来り年よりむむはゆらと誇る劇齋感嘆しくいひ
 膝をうち鳴くとの速あらずをけのたをよ心を用ひて膝を研しく俱は留ん

この盃の酒ありとひらけとて阿磔を取らば又別盃ととり揚て異社とら
 浮らば且笑ひ且樂む程は日ハ暮れ且蔵ハ行灯を掲げ一盃ハ
 燭を添れど劇齋とれとんむと酒宴の時と移まらん其れのみひとり
 醉よめ勝で朧を枕に臥する當下異社ハ目を注しく霎時阿磔ハ耳
 語つ俱よ盃盤をとり納めく庖福ハ赴死弟子局とて覗けく阿磔と
 蜜ハ且藏ハ引見しなとをれが寝まの鐘の音はあり異社ハ耳を敏く
 されバト更初れ誘と阿磔をとり立ち又子舎へ赴けつたれ葉内を
 知り負便室の戸棚推開くはとて如き々と臥被み布して物も
 足らばと棚の隅より索せし客枕見身今宵ハこれとて速と阿磔ハ受

取て懐紙をもち被せしが都の富士ハ降雪の似て對かぬうひく衣脱
 更んと立程ハ異社ハ急ぐ退きと告別くもげよあが宿所へ還りけり
 かて阿磔ハ酔臥せしあとのほろろ立りくを夜夜深くゆめあり御寝
 たりあつむやうの喃々と密やう呼覚されても劇齋ハ裡睡を猫拍音ハ
 三声呼せつ心と答く起り腕を捺り左え右え異社ハ急退り一歩
 どの程ハ熟睡せんれあつ鈍きわたりとひひく立バ後燈運歩の
 現定めかた人心きつハ飽き利ハ耽り香ハ解ひ色ハ倒れとて
 ああ抱苗くそが扶けて臥房ハ入れたりわたり劇齋ハあ
 夜より阿磔を留めく十襲秘藏珠玉の如く現劇齋がらとて来色を

好ぶるもの真に好ぶるものありてその身紀の山家は生れて餘三十五餘を色相
 無量の美醜を知れ且家貧しく足るものありてその性慳しく吝みしが頗り
 名利の餓鬼とありて富と羨むの外ありてかゝるその兄ありて湯治遺
 財を獲てその足ることを遂に京にゆくも富饒はありて人既
 富饒あるが快樂を求て年を損せ且その樂ハ真の樂はありて外ありて
 慾は充財ありて多るれば其の貪りて止まばその性吝りて其の必嗜慾多と
 大く妻妾の爲に驕り是小人の心ありける故に聖語は驕且吝と有り驕り
 の心賤く吝りて其の必驕り劇齋素ありて人これに今この美
 妾を獲て酔後の水は異なりて一時の慾は稱へば快く多るも身の

仇ありとあらば其の況阿磔が美ゆき淫る痴郎を湯治をありて其
 劇齋が氣質をあらわしあをりて其の節約ありて陽に費を省くが
 如くともく家事に心を用ひてその意は協するともや且虫八ホを勅て
 りその失ありて其の竊に諫て爲し隠し又勤るるとありて其の譽てあるに告る
 とやこの故に虫八ハ阿磔は媚て譽を求め其の唱と敢る名を
 呼ぶとありて劇齋亦よく程よく家事を阿磔に任せしむるの權をのり
 渠は歸して正妻は異なりて其の独且藏の初より其のそとに其の
 多くも諫て用らる死ありて其の勤むるを陰陽よく勤果れば退く
 夜學とありて絶く阿磔は諛るを況敬とありて嗟嘆のあり折あるは

わいよ諷諫しとれが劇齋還これと怒りていひ且蔵と疎とる程小
 おれきウトとあつて下女あつて不便多そ劇齋又異社と召てあの
 阿磔が家事と執るよ及びて下女あつて不便多そ劇齋又異社と召てあの
 ろと相諱つ恰好この婆々が女児あ宿所在りその名と匙と呼まて十六
 歳よりありあ清水寺の舞臺の下ゆく劇齋が琉球扇と拾りての
 ゐん異社への匙と薦めくもの炊爨遣つ阿磔の豫く相識さあて大々
 ちて歡びて懇に勅使へが匙も亦歡びてその指揮を禀するとあ興あとの
 唱うそればや阿磔の匙と使ふ及びて大約酒食の餘りあれ齋と異社よ
 贈遣し衣裳の舊て且藏するあれ齋と異社よ贈遣し私の錢あれが
 異社が来るを持つてと竊取しとせしむ異社これ彼も徳つたて微妙き

多とせりや。それが古語よとわり老圃よあふれが圃と問ふとなるよ。
 街妻も又如此あり媒婆あふれはくとの趣と尽はとあ異社を豫く
 劇齋が氣質とあきあきするめとよく阿磔よその意とぬさしく衣裳
 結髪化粧が迄初へて花よよせむかくと久あなれと衣縫ふまを
 ちる頃終り習初一の糸竹の技よ至りて渠が得意の藝かれどもその
 ちく惹く衣の更とよくはとせり現彼妻がわらわ劇齋の氣とよく
 家事と任用せられ異社が謀よあつて下ぶ家の権を執りてあめが
 隨意せらるる家事は暇あれがと衣よの舊の如く異社許遣
 しく洗せり縫せを阿磔がみづらると下は毎日毎の化粧と結髪のと

書石本支巻二

それより多くは匙子梳せ或は女草頭といふもの結せせり。まの人の使へ
 ども私の恩と被けくせり。物と恵まらば蜜八匙ハこれが為は奔走
 せむといふとあり。死加旃あう人も衣裳と欲しく流行と好む酒食の
 う人も修るに多うり。その費少くわぬ。劇齋既は惑溺し。瞽の如く
 聾の如く。阿磔を移るると一毫もあらずとを。適渠の家事
 かも才あり。かれが。苗守後やせりと。憑く。あも既は。人のあつた。
 この住居ハ。不陟り。もた家も。わと。求る程は。次の年の春の比。富小路ハ
 賣家あり。其処ハ。間敷も。廣く。土蔵とあり。わぐ。家を。買替つ。
 富小路へ移徙し。療治の。繁昌せり。かく。今茲も。春過。夏も。氷水

求る六月の中。院は。あり。有一日。劇齋ハ。且蔵と。召て。の。藤白。家宅
 莊園ハ。曩は。里人ハ。預措つ。去。去。秋の。収納。減。少。く。な。つ。た。末。に。違。う。は
 今。あり。彼。地。に。赴。秋。の。季。に。返。苗。して。あ。く。その。豊。凶。を。檢。て。今。茲。の。収。納。ハ。さ。う。し
 去。歲。の。未。進。と。う。立。は。蜜。八。と。違。ん。と。渠。が。ど。ね。が。あ。つ。つ。は。便。り。は。な
 是。紀。伊。国。人。あり。彼。里。人。ハ。私。に。倅。忽。と。さ。う。道。中。ハ。浪花。水。行。を
 進。ま。バ。路。費。輕。え。彼。地。に。逗留。日。と。歴。ると。糧。より。外。は。物。は。田。舎。よ。い。く
 之。の。錢。と。費。は。び。き。日。敷。と。計。り。路。費。を。與。ん。但。儉。約。と。宗。と。と。か。め
 賄。欠。し。明。朝。未。明。は。發。足。せ。よ。と。嚴。ま。あ。ろ。と。い。ふ。些。の。路。費。を。取。せ。う。が。
 且。蔵。ハ。一。議。及。び。猛。は。起。行。の。准。備。し。つ。その。詰。且。疾。起。と。あ。つ。と。その。他。の

傍輩子別と吉淀船は衆人として伏見と投て立せり。不題筑紫の探題筑前
 介胤時ハ時頼朝臣の親族也。六波羅は重く富貴を以て
 九ヶ国の總管たり。あつて胤時四月の比、浮腫を患ひて起居安らざる。
 既ハ長病著シ、鍼灸茶餌の驗なく。京都ハ名医を徵り、時ハ北條
 左近將監長時朝臣京都の守護として六波羅の館に在り、これ亦時頼
 朝の親族也。五畿内の總関たり。後ハ北條氏の親族兩人を上り、
 六波羅ハ南北の兩館に置り、よりて世ハ西六波羅と唱ふ。この時ハ長時
 朝臣の館に在り、程ハ六波羅ハ筑紫の探題の爲ハ良醫を
 擧ぐ、此彼と議せり。富小路ハ名草劇齋といハ醫師あり、維難

治の症よりとも多く生じ、そのを實ハ百發百中の效驗ハ世の人ハ耳目
 あり、そののこともよく知られ、頻ハ薦められ、十人あり九人が遂ハ衆議
 一決して、まづその名草とやんとて、筑紫へ下せ、猛ハ劇齋と六波羅の館に
 召さ、云々と命せり。劇齋ハ今ハ少影の病架とて捨て、速く西國へ赴く
 こと、難義ハあつた多病ありとて、只管ハ辭し、これともいへず、許さ
 ず。道中の驛馬、使者人夫のみハ六波羅の西沙汰より、一身の支度して、速く首途
 せり。その功ハ飯京の後勸賞、且沙汰ハ及ん、とて、いととて、更ハ再々推辭
 せり。首途の日を定め、れて、宿所ハ退り、阿磔ハ如此とて、傳の
 趣ハ報知して、行装を調ひ、と甚急とて、又劇齋ハその財宝と志士蔵

...

...



